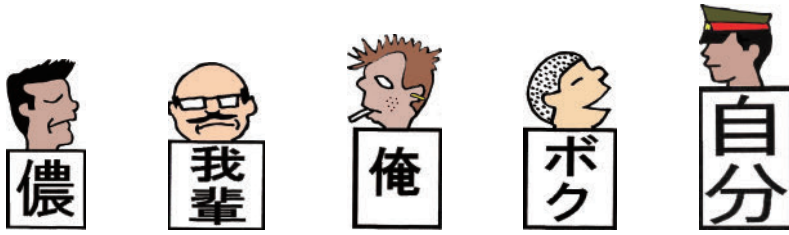


むかし「局アナ」いま「隠居」
男たちの「一人称」



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中



この国の「男性一人称」は、いつの時代も地位や立場で異なるようです。一九四五年まで、天皇は「朕」でした。だからといって、私生活での昭和天皇が皇后さまや、侍従など周りの人に、「朕はどうしようしたいのだ」と仰っていたかどうかは判りかねます。当時 天皇は、建前として神様でしたから、公式の場、例えば御前会議とか文書の上では「朕」でも、内々では「私」だったかもしれません。先月、テレビで お気持を表明された今の天皇は「私」と仰いましたが、若いころご学友には「ボク」と言っておられたでしょう。いや、ひよつとすると、ヤンチャ時代には「オレ」なんて 言ってみたことがあつたかも知れませんね。まあ「朕」は さておき、昔の男たちの一人称とは：磨、余、某、身ども、拙者、手前ども、あつし、おいら、おら、わて、わい などなど、日本は身分優先の封建社会だったことが偲ばれます。

現代なら殆どの場合「私」(わたし or わたくし)で、何とか世渡りができますが、身分が喧しかった時代の下々は、言葉選びに かなり気を遣ったことでしょう。
 * 男の子が色気づくくと、「俺」と言ってみたくなるようですが、長嶋茂雄氏の過ぎたモーニングショーのコメントーターなのに、「俺なんかさあ」とタメクチを連発するかと思うと、急に改まって、「暴力団の方々が」：てな調子で、暴力問題を論じたりして：体育会系のお家柄が微笑ましいですね。ウチの孫息子にも 一人、大学生のくせに、私の前で「俺」「俺」と言つて粹がつているのがいます。まさか 就職面接の場や、教授の前で「俺」なんて言うことはないでしょうけど…。私が学生の頃は親の前で「俺」とは言わず、「ボク」と言っていたと思います。アナウンサーになって間もない頃に先輩の前で、

「ボクがやりますから…」と言つたところ、「いい歳して「ボク」なんて言つていたら、本番で出てしまおうぞ」と窘められてハツとしたことがありました。「そうか、自分は 放送局のアナウンサーだったんだ。学生気分が抜けとらんな」改めて自分がプロであることを自覚したものです。「自分がプロである」という「自分」は、通常、普通名詞ですが、ご存知のように、戦時中の軍隊ではこれが 一人称の「私」「僕」という意味に使われました。自衛隊は今でもそうではないでしょうか。一九九六年の朝日新聞「天声人語」の中に、戦時中、軍隊で使つていた「自分」について こんな記述がありました。
 * 「私」…などと言つたら、「たるんでいゝ」といつて、ビンタを食らつたものだ。：軍隊 体験者の話である。色々な地方から 若者が軍隊に集められて、「おら」

「わし」「わて」と、様々ではおかしい。それで「自分」に統一したそうだ。
 * 20年前のこの記事ですと、当時のNHKでは高校野球中継の放送席に野球部員を招いて、彼らの声を番組に反映させていたようですが、そんなとき彼らが、「自分もそう思います」と、「ボク」や「私」でなく、「自分」と言つたのです。これを聞いた天声人語の筆者が、戦前の軍隊を連想したのは、彼が学校教育を受けた昭和20～30年代には戦争の記憶が色濃く残つていたからではないかと振り返つていました。更に「おら」「わし」「わて」には土地の匂いを感じるが、「自分」というのはのっぺらぼうだ…と結んでいます。



野球部に限らず、多くの
体育会系の部員や自衛隊の
皆さんは、今や何の屈託も
なく自分のことを「自分」と
言っていると思います。が、
仮に「ボク」「私」と言っても、
ビシタを食うことはないで
しょう。

でも「ワテ」「オラ」なんて
言うと、上官や監督は、

「おまえ ナメとるんか!!」
と言って張りとはされる
かもしれません。

自衛隊でも学校のクラブ
活動でも「指導」という名の
暴力が絶えませんがねえ。

*
50年も 大阪で暮らして
きた私でも 使ったこと
ない大阪弁、

「自分はどない思うの?」

というのがあります。

お察しのように、

「おまえはどう思うの?」

という意味になります、
この二人称はかなり親しい
間柄でないと使えません。

「おまえさん」とでもいった
感じの二人称です。

このように一人称だった
「自分」が二人称になるのは、
一人称「手前」が、「てめえ」

と訛って二人称となり、
「テメエをアツ殺してやる」

ということになりますし、

関東、甲信地方の一部でも、
一人称の「我」を、「お前」と
同じ意味に使っています。

戦時中、長野に疎開した
私も「ワレ」を「お前」という
意味に使っていました。

当時 軍隊が使う皮革を
鞣すタンニンを採るため

「ワレモコウ」を探し、その
根を掘らされたものです。

長野の国民学校の先生は、
ワレモコウの名前の由来を、
「ワレも来う、なんだぞ」

と 教えてくれましたが、
この「ワレ」も、目下の者や

仲間を使う聊か乱暴な言葉
だったと思います。

「ワレ」よりも、やや丁寧な

二人称「君」は、元々 天皇を

意味する普通名詞でした。

それが、いつの間にか、

「おい君、これを頼むぞ」

…こんな調子で、部下とか

親しい仲間に使う二人称の

代名詞になっているのです。

今の日本で「君」といえば

「あなた」のことです。

今どき天皇さんを「君」

なんて誰が言いますかいな。

戦前、私が幼稚園のころ、
国歌の歌詞「君が代」は「
とは「あんたの用は」という
意味だと思っていました。

ですから外国人が君が代
の歌詞を「あんたらの世の
中は」と解釈して、

「日本人は、祖国を他人事
のように思っているのかな」
と誤解されかねません。

私のような年寄りでも、
「天皇を、お前さん呼ばわり
しているような国歌だな」

と思うことがあります。

憲法を変えたり国歌を
無理に歌わせたりする前に、
国歌名や歌詞を考え直す

のが物の順序だし穏当な
手法ではないでしょうか。

*
人称代名詞は時が経つと、
一人称が二人称になったり
その人に対する敬意が低下
したりします。

例えば「貴様」などは「貴」

という字が付いているので

当初は敬意のこもった言葉

だったのかもしれませんが、

今は「てめえ」「同様、乱暴語

の二人称と言えりましょう。

同様に「貴兄」も、漢字を

見ると敬意を感じますが、

目上の人や、貴兄に対して
使うものではありません。

京大 文学部の国文科に
在学中だった親戚の娘が、
50歳を過ぎた私に寄越した
礼状の冒頭に、

「貴殿 益々御清栄のことと
存じます」
とありました。

「貴殿」…ねえ。チャンバラ
映画じゃあるまいし…。
「貴兄」にしろ「貴殿」にしろ、
「貴」を付けたからといって、
必ずしも敬称になりません。
「氣」を付けて頂きたいもの
です。ねえ。

*
戦時中、疎開先を転々と
していた私はガキの頃から
言葉選びに気を遣いました。

言葉が違うと「イジメ」に
遭うのです。

徳島で、つい「ボク」と
口走った途端、
「あ、こいつ 江戸っ子じゃ」
と 言われたし、栃木や、
長野でも、「ボク」と言うと、
「何だ。お坊ちゃんみてえ」
「上品ぶるんじゃねえ」
何かとイチャモンをつけ
られ、意地悪されたり仲間
外れにされたりでした。

あの頃、徳島の男の子は
「ワシ」とか「ワイ」と言って
いましたし、長野や栃木は
「オラ」でしたが、長野は
女の子も「オラ」を使ったの
ではなかったでしょうか。

子供のころ私が「オラ」と
言っていたと、いま思うと
何だか妙な気がします。

*
朝日新聞で、夏目漱石の
「吾輩ハ猫デアル」が連載
されたお陰で、今や死語に
なりかけた懐かしい明治の
言葉に出会えました。

ただ「吾輩」という言葉は、
死語どころか、今も ずっと
使われています。

これは、漱石の「吾輩ハ
猫デアル」が、あまりにも
有名だったのと、もう一つ、

自分のことを、常に「吾輩」
と称して 胸を張っている
異形のタレント「デーモン
閣下」の存在も無視できぬ
ものがあります。



自分のことを、常に「吾輩」
と称して 胸を張っている
異形のタレント「デーモン
閣下」の存在も無視できぬ
ものがあります。